# 【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兎記』（明和六年三月～五月十五日）


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-05-27<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: KONISHI, Yoko, KIGOSHI, Ryuzo, KURODA, Satoshi, MUROYAMA, Takashi, WATANUKI, Tamon<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.24517/00054193 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兎記』（明和六年三月～五月十五日）

人間社会環境研究科　人間社会環境学専攻
小西洋子
石川県金沢城調査研究所　所長
木越隆三
人間社会研究域学校教育系　教授
黒田智
石川県立図書館　加能史料調査委員
室山孝
人間社会環境研究科　人文学専攻
渡貫多聞

**要旨**

小松称名寺所蔵『烏兎記』は、小松勝光寺十一代住職周好による、明和六年（一七六九）一年分の日記である。特に「小松寺庵騒動」に関する史料として知られている。また、周好が日々伝え聞いた話が書き留められており、小松町周辺のみならず、大聖寺・越前の出来事など、その内容は多岐にわたる。

既存の翻刻は誤脱もあるため、改めて全文を翻刻し、紹介する。翻刻により、多くの研究者の利用に資したい。本稿は二回目である。

**キーワード**

「小松寺庵騒動」「郡中御影」　能美郡　近世浄土真宗

**【翻刻】**

三月朔日

一、御真影付御取持肝煎講中頼之義ニ付、達残候分二ケ村へ今日罷越候処、壱人之肝煎者日蓮宗、壱人者高田派ニ而御座候、併一郡一統之義ニ候故、受者宜しく、講中も出来致、大悦致、帰寺致候、扨々宗旨弥槃(繁)栄之端相与悦斗ニ御座候、

一、越中古国府勝興寺殿(隠真、前田時次郎)再度金城へ為御立替、御帰俗ニ付、西御門主(本願寺法如)ゟ被進候三幅対懸物図賛覚書、

富士之絵三幅対、円満院宮祐常(寛宝入道親王)御筆

右、勧修寺宮御賛

あしからの山たちかくす雰のうちに

ひとりはなる、富士のしら雪

中、近衛摂政(近衛内前)

言の葉もおよハぬ富士の高ねかな
　みやこの人にいかゝかたらん
左、閑院宮（尚仁親王）
　立のほる雲もおよハぬ富士のねに
　煙をとめてかすむ春かな
此絵賛之覚書、笠屋弥右衛門所持ニ候間、借用致候、扨々珍敷物ニ而候、

二日

一、差而相替ル品者一向無之候、夜ニ入候而、唯雨風はけしく相成、東雲頃迄ニ晴申候ゟ外、別義無之候、

三日

一、京都三条高橋新七、号子謙、冷泉院（冷泉為任カ）之御門弟ニ成、歌を詠納テ上申候、其歌に
　散もうし　吹すはいかてかほるまし
　心つくしの梅の下風
と申上候得者、被仰出候者、此歌者妙歌ニ而候、是以後者、歌詠候事可為禁制旨被仰出候与、埴田屋長兵衛咄ニ承申候、

四日

一、朝五半頃ゟ余程風ニ而、七少シ前ゟ少々雨降候得共、早速晴致快晴候、此外差而相替義者無之候、

五日

一、串茶屋町芝居、明後日ゟ顔見世致候由、円月咄承候、（今江法性庵）

六日

一、紀州殿（徳川重倫）御領地之内之浦方江唐船壱艘着致候、依之、右之舟者本唐之舟ニ候哉、通士も差而無詮、此船を先へ御送候ニ付、夥敷御物入故、御用金等之義も前々ゟ者過分ニ被仰付候、仍先達而記置候三ツ井も右之御入用金ニ候旨、大聖持谷口清安咄ニ承申候、

七日

一、日之内快晴、夜も静ニ而御座候、差而相替義者無之候、

八日

一、高岡超願寺上京之由ニ而、門徒壱人召連参着致候、其夜承候得者、先月彼地之辺大風ニ而、井波瑞泉寺殿鐘楼吹返シ候旨咄致候、
一、昼夜共ニ相替義者、差而無之候、

九日

一、晴天ニ而者候得共、朝五半頃ゟ余程風荒く、暮六半頃ニ者しつまり候、其外別条無御座候、

十日

一、超願寺昼八時出立、大聖持泊りニ参申候処、今江村八幡屋方迄拙・来生両人見送、彼ニ候而壱献進メ申候、
一、本吉等之辺、於浦方船方共ぬけ荷致候ニ付、加州郡奉行之内三人、能州郡奉行之内両人、遠慮被仰付置、尚又船頭者御国法之通り可被仰付段、其聞へ有之、風聞致候、扨〳〵浦方之騒動気之毒ニ存候由、吉竹屋九兵衛咄ニ承申候、其荷物者米ニ而候由ニ御座候、首尾克納候様ニ与存事ニ御座候、
一、昼八時ニ長崎出火致、三軒焼失候よし、町者勿論、近在以之外騒布、風も少々有之候故案し申処、早速ニしめり、先々大悦致候、其砌超願寺見送ニ而、大領野を通り候処、長崎真入寺舎弟廉応ニ逢ひ、以之外急キ候様子ニ而、互ニ挨拶麁抹成事共ニて御座候、
一、夜五ツ半頃、自是東里八幡辺出火之由ニ而騒敷事ニ候、評判而已ニ候、

十一日

一、江沼郡宗門寺請状之事

宗門寺請状之事

加州江沼郡何村何右衛門誰

一、何宗　何郡何村何兵衛何　誰

右、拙寺檀那実正也、若横合ゟ公儀御法度之宗門与申者於有之者、拙僧罷出、急度相誘可申候、依而為後日寺請証文如件、

何郡何所何町　寺号

年号月日

宛所

右之通相調へ遣■申候得者、間違無之候、

一、夜前五ツ半頃八幡辺之火事之義、慥成事いまた相知レ不申候、其頃串本村之番太郎焼失致候、是者実正成義ニ御座候、是も茶屋町与申義ニ而評判致候得共、是者虚言、本村焼失者慥成様子、隣院(勝福寺)御舎弟刑部卿殿御咄ニ承申候、尚又夜前九ツ頃小松泥町ニおゐて、少々之火沙汰有之候、扨々騒しき事共ニ而御座候、

一、今日九頃見付申候、山之内今朝ゟ火事有之候、五十谷辺歟之様子、評義区々ニ候処、能々承候得者、白山之麓拾八ケ之内、丸山与申所不残焼失致候由、妙永寺一針ニ而承候旨、咄申候、

十二日

一、夜前下里末信村与申所之肝煎へ投火有之、既ニ燃上り、牛嶋村・小長野村出合打消シ申候故、火者洩不申由承候、是等者河原乞食共之仕方ニ而候よし、扨々世間之難渋故、油断之難成時節ニ而御座候、

十三日

一、当年当役隣院殿御勤候ニ付、御真影御引請、朝五過ニ参候間、拙義者助役之事故、一往御届として為御知有之、委曲承知之旨及返答候後、隣院殿江罷越、御真影御待請申上相見、慥ニ改メ置申候、

一、小松於新町、酒に酔、鯖差庖丁ニ而眼を切、速ニ落命致候よし、筒金屋久兵衛咄ニ承申候、当十一日昼八ツ頃之事ニ候、扨々業与者乍申も無慚之事ニ而御座候、

一、先月何日頃ニ候哉、武州江戸本庄(所カ)致出火、幅壱丁長サ三里、暫時ニ焼失致候由、則筒金屋久兵衛咄申候、

十四日

一、昼夜共ニ、差而相替義無御座候、

十五日

一、日之内一向ニ別条無之候、宵之内少々雨降候得共、頓而晴申候、

十六日

一、昼夜共ニ、差而別条無御座候、

十七日

一、朝五ツ頃隣院殿ゟ用事之趣申来参候処、御使僧御差向いまた相知レ不申候ニ付、如何可致哉之趣、御示談有之候、則筒金屋久兵衛・金平や清右衛門・佐々木屋六右衛門三人相見へ、先々今日金沢三度相見合、様子相知レ不申候ハヽ、京都へ飛脚遣可申旨、決談致候、

一、来月時次郎(前田治姫)殿江戸へ御下り、御目見相済候ハヽ、追付殿(前田重教)之帰国を願、帰城被遊候様ニ致シ、尚九月頃ゟ殿之義ハ、国隠居被遊候様ニ致度与之風聞致候、依之虚実者相知レ不申候得共、押隠居之様成仕形、気之毒ニ相聞申候、称名寺殿御咄シニ承申候、

一、是迄者於寺社奉行所、皆々御人持斗ニ而候処、若御老中之内壱人宛御出シ置候、是者寺社所三奉行之後見之よし、則称名寺殿御咄ニ承候、

一、殿様御帰国被遊、八月頃者小松へ鷹野ニ被為入候哉、鷹匠衆咄申候者、渡り鳥者合セ、居鳥者合セ申間敷旨、被仰出候よし、咄被申候、且又先年小松へ殿之被為入候入用方之しらへ可遣旨、会所へ申来候旨、是ゟ相考候所、弥八月頃者小松へ殿様可被為入様ニ相聞へ候よし由、筒金屋久兵衛咄申候、

十八日

一、今浜侍従(光西寺カ)殿交結致度旨ニ而、上京止宿被致候、其砌咄候者、鵜飼(砂鉄寺)触下ニおゐて、法義騒動出来致シ、則御使僧澍法庵(法雲院)鵜飼止宿之節、同行五百人斗押寄候与咄被致候、扨々何方も騒しき事共ニ而御座候、是も及言上候時者、以之外之混雑ニ相成候故、先ニ其分ニ相成

居申候、元来澍法庵不退院之法義筋を打レ候より事起り候事共ニ而候、

十九日

一、自京都紙面下り候得共、角院殿（本願寺）留主故破封難致候、就夫壱通之上書者、本蓮・勝光・称名三人、又壱通ハ本蓮・本光、勝光三人ニ而候、此弐通角院殿へ遣候処、留主故如何取計可申哉之趣、隣院殿ゟ超覚坊を以為御知有之候故、相答候者、御用趣も難計候間、角院殿遠処へ御越、急ニ御帰寺難被成候ハヽ、角院殿役僧之内壱人相見シニ立置、御仲間打寄破封致、可然御用早弁シ候様ニ致度与相答遣申候、

廿日

一、京都ゟ之紙面共致披見候、文体如左、

御札致披見候、先以御所様方御機嫌能被為成御座候、然者先達而各様為惣代称名寺殿御上京御願之一件、格別御使僧之義、日限等早速御沙汰被仰出候様取斗可申旨、御紙面之通致承知候、此儀称名寺殿先達而御上京之節、御使僧猶又日限等も、先例ニ而格別ニ御願之事ニ有之候処、御願之趣者御聞置被成、追而何れ共可被仰出候旨被仰出、其旨称名寺殿へ申達候、猶御家老中ゟ御沙汰可有之候、右為可得御意如斯ニ御座候、恐々謹言

集会所月番

三月十四日　印

本蓮寺殿
勧帰寺殿
本光寺殿
本覚寺殿
勝光寺殿

又壱通之文言如左、

当月朔日、貴札致拝見候、先以御門跡様（本願寺乗如）御機嫌克被為成御座候間、可被御心易候、先達而称名寺殿御上京被成被仰上候義ニ付、此度御紙面之趣致披見、委曲御家老中江申達候、左様御心得可被成候、右御報為可得貴意如斯御座候、恐惶謹言、

富井勘左衛門　印
松井外記　印
杉浦帯刀　印

三月九日

加州小松
本蓮寺様
勧帰寺様
本光寺様
本覚寺様
勝光寺様

右之通御仲間へ者申来候、称名寺殿之義別封両所ゟ、御肝煎講中へ者御納戸ゟ壱通参り申候、此義ニ付御肝煎講中打寄示談之趣者、此分ニ而者難差置候得者、郡寺庵御取持講中へ者町共ニ、当廿五日之御講之義ハ相延シ候趣触渡シ、京都へ者、今日飛脚を以又々可申遣候与致決談、各々退出致罷帰申候、

二十一日

一、今朝未明ニ二日方京都着之飛脚弥遣申候書状共、文言如左、

一筆致啓上候、先以御門跡様（本願寺乗如）御機嫌克被成御座、恐悦奉存候、当朔日出之格別御使僧願之義ニ付、又々書中を以得御意候処、集会所・御納戸方両所より御報九日出、昨十九日ニ相届、致披見候得者、御聞置ニ而、重而御沙汰可有之与之趣而已ニ而、最早廿五日御講之日限ニも差当り候得とも、御使僧御差向之御沙汰、今以無御座、一郡一統ニ迷惑仕候、如何相心得可申候哉、且廿五日御講日者、先達而願上置候故、一郡ニ触出候得者、定日御延引候ハヽ、廿五日之後、何頃ニ御使僧御差向可被下候哉、慥ニ御報被仰下候様ニ与奉存、態

飛脚を以如斯ニ御座候、恐々謹言、

当役　勧帰寺　印
助役　勝光寺　印

三月廿一日

月番
御家老御衆中

右之通申遣、称名寺殿者御懸合ニ候者、歎キ之文体ニ而三ケ所へ被遣、且又御肝煎講中ゟも集会所・御納戸両所へ書状遣申候、

一、町郡寺庵道場・御取持講中へ触出申候文言如左、

今般当郡へ格別御差向御使僧之義ニ付、京都ゟ御紙面到来、致披見候処、御本山御槃用、御役僧中御手張、依之当郡へ御使僧御差下シ之日限いまた不申来候、仍而当廿五日御講相延シ候条、右申入度如斯ニ候、以上、

当役　勧帰寺　印
助役　勝光寺　印

三月廿一日

町郡寺庵・直参道場へ者如此、御取持講中江者、除助役廻口を加へ相触申候、此義ニ付本蓮寺殿一向ニ承知無之候故、当役・助役両印ニ而相触申候、此一截不思義ニおかしく存候故、為後代書記致置候、

二十二日

一、角院殿御仲間へ御示談も無之、御本山へ状箱被遣候由、則朝五頃ゟ村井屋喜兵衛参シ、七半頃ニ決談致書状相認、十五日出之、三度ニ渡シ、状賃五拾銅払候旨承申候、何事ニ候哉、御寺法之義者御仲間一統可及示談筈、尚又御寺法者其年之当役ゟ可致所不能、其義御本山へ一分ニ書状箱御登セ候段、一向難心得候間、書記致置候、

二十三日

一、廿一日ニ京都へ又々登セ申候飛脚勘兵衛、宿々ニ御使僧京都ゟ御下向有之候哉之趣相尋、段々罷登り候所、通り過シ今庄ニ而相尋候得者、昨日府中泊りニ、吉崎へ御差向之御使僧罷下り候旨承、引返シ追掛候所、水落ニ而出合、則御本山江小松ゟ罷登り候飛脚之者ニ而候、小松へ之御使僧者、御下シ如何之義ニ候哉之相尋候所、いまた不承候、則小松へ之御状箱持参之旨ニ而、相渡シ申候、飛脚右之御状箱唯子坊より受取、今昼四過ニ下着致候、御状箱之上書者、本蓮寺殿・勝光寺殿与有之候故、角院殿へ隣院殿ゟ及案内候得者、他行之由御答有之、依之拙方ゟ、京都ゟ御状箱到来、定而御使僧之義存候得者、早ク披見致度候間、御破封御披見後、此僧へ御渡可被下候之趣、添状致シ、使僧知照を以、角院殿之行所へ可参由、申付遣候所、其節者在寺之旨ニ而、則破封披見写被返候、披見致候文言如左、

貴札致拝見候、先以御門跡様御機嫌克被為成御座候、然者御仲間為惣代、先達而称名寺方上京、委曲被相願候一件、御聞届之段、御門末一統難有御請申候旨、就夫今般御差向之御使僧発足日限等、一郡へ相触被申度段承之候、右一件先達て称名寺上京ニ而被相願候ニ付、先御聞置被成候間、何れ共追而御沙汰可被仰出段、同人江被仰渡候事ニ候、今般各方ゟ之御紙面ニ者、右之願筋御聞済有之候様ニ相聞へ候、此義甚間違之事ニ候、差而御聞届与申訳ニ而者無之候間、此等之訳、称名寺方へ篤と御聞合可被有之候、且御使僧発足日限等之儀も、先達而一郡へ被相触度由、此儀とても右被仰渡相済候迄者、是迄之すかたニ而、別ニ被相触候ニ者及申間敷候、且例年一通り之御使僧之義も、右願之一件、何れ共被仰渡候迄者、其御沙汰有之間敷候、右御報如是ニ候、恐々謹言、

若林蔵人
直政　印

三月十五日

下間治部卿
頼静　印

加州小松
本蓮寺殿
勧帰寺殿
本光寺殿
本覚寺殿
勝光寺殿

右之通御仲間連名、称名寺殿者別ニ御書状箱壱到来致候、状箱角院殿より被相返候節、遣候書状返書文言如左、

京都之紙面到来ニ付、為持被遣致披見候、先達而称名寺殿御下向之節被仰聞候与者、甚相違之趣ニ御座候、ケ様ニ不決定之事ニ御仲間連印之御請等相登候事共申者、御同例ニおゐて僉儀未熟之段、難得其意事ニ御座候、拙僧ニおゐて外聞ヲ失、迷惑いたし候、以上、

三月廿三日　本蓮寺

勧帰寺様
勝光寺様

右之返書、又入用之事も可有之与存候故、留置候、

一、京都ゟ格別御使僧之義、いまた御聞届与申義ニ而者無之段申来候得者、角院殿ニ者赤瀬屋次右衛門・村井屋雙子等打寄、甚歓喜被致候段承之候、以之外之不敬之至、言語道断之事ニ候、最初御仲間連判之振合与存外之事ニ共(行カ)、奇怪ニ覚申候、

一、先達而称名寺殿格別御使僧願之義ニ付、上京被致候得者、何与相心得候哉、赤瀬屋次右衛門澍法庵方へ注進ニ参申候、扨々御正統信仰与申身分ニ者不似合事ニ候、一笑可致事、不過之覚候、

一、能美郡ゟ格別之御使僧被願候段、承申候、若々御使僧格別ニ御差向有之候得者、能美一郡及大変候間、澍法庵善福寺殿へ咄申候所、善院殿被答候者、格別之御使僧申受候得者、御本山之御為メニ相成申候事有之間敷義ニ而無之候得者、強而差留メ候事難心得与被申候得者、澍法庵再答ニ者、兼而熟談致置候与申候旨承候、誰与熟談致置候哉、未審被存候、

二十四日

一、浄誓寺門徒病死ニ付、口上書遣申候、文言之覚、

口上

拙僧旦那埴田屋小兵衛妻、致病死候ニ付、及断候、御伴僧之内御参詣被仰付可被下候、尤葬式時割之義ハ、此者へ御尋、乍御苦労御参詣可被下候、以上、

三月廿四日　浄誓寺　印

勝光寺様
御台所

右之通申遣、印形間違有之候故、相返申候所、見合印鑑相出申候、則葬式者暮合ニ致へく旨申候間、参詣之義妙永寺へ申付候、

二十五日

一、昨昼八半頃ゟ雨降出、夜を通シ尓今晴不申、以之外之大雨ニ相成申、梅天気色ノ様ニ見渡り申候、

二十六日

一、雨者一昨日より降続、今昼九過ゟ晴候而、八半頃者漸快天罷成申候、扨々夜前之風雨不思義ニ思ふ斗ニ候、

一、昨日昼八頃、角院殿出府様子、通り掛ニ西照寺方へ立寄、立花・砂ノ物等土足ニ而被見候由、慥ニ途中ニ而出合候者之咄ニ承候、供ハ若党・林内両人ニ而御座候、林内ニ相尋候所、出府様子申候、相尋申候者ハ大工之七郎兵衛与者(申脱カ)ニ而御座候よし、隣院殿ニ而承申候、此等の義共難心得候故、留置申候、扨々今宵者静成事ニ而御座候、

二十七日

一、角院殿出府之様子如前、一昨日則赤井殿(称名寺)下ノ江ゟ少下モ之方ニ而

出合候処、相尋候得者、少遠方へ罷越与之事ニ而、何方与申事者不被申候、大体者出府之様子ニ相見へ申候与、則赤井殿御咄ニ承之申候、

一、本折長円寺了忠者癪ニ而、頭へも鼻も以之外見苦敷相成候故、先頃信証院（運如）様御忌之節も出仕者不致候由咄承候、

二十八日

一、隣院殿ニ罷在候小坊主者、当春越前米脇親殺之者之倅成由、則坊主ニ成度よしニ而参居候、則隣院殿御咄ニ承之申候、

一、隣院殿門徒之内金沢ゟ、澍法庵金沢発足者来朔日二日成様子、為相知申候、

二十九日

一、能美郡格別御使僧願之義ニ付、澍法庵金府評判以之外悪敷、彼是以余程不首尾之様子ニ相聞へ申候、就夫前ニも記置候通り、能美郡格別ニ御使僧願上候事を以、御本山之御為ニ相成候哉、委曲御不為之事哉、不得知候ニ而差留候事、我情を働候趣、言語道断之坊主哉与而、善福寺殿以之外腹立被致候由、則善院（善福寺）殿へ出入之者茜屋吉右衛門与申者咄申候、且又松任聖興寺殿ニも澍法庵へ対シ被申候者、先年ゟ能美郡之義者、格段之思召有之候故、御真影も被下置候、依之此度小松仲間中、格別ニ御使僧被相願候処を、其元被差留候事難其意得、且能美郡之義ハ、其元抔之一往之料簡ニ而者不行抔与て、及対侖（論）、澍法庵者言負、黙然与して居申候旨、尚又金沢ニも、以後者御使僧ニも彼澍法庵者受申間敷、以之外不評判ニ而、初与者天地雲泥之相違ニ罷成申由、埴田屋長兵衛金沢ゟ罷帰り咄ニ承之申候、一笑々々、

四月朔日

一、隣院殿・予・安藤喜槃三人連レニ而、真向なる太郎丸（神太郎丸神社）へ行寄、夫より八幡宮之拝殿ニ而も一献致シ、乗興候故、直ニ芝居へ参し、不計慰致シ、夜八ツ頃ニ帰寺致候、

一、夜九前火事之様子ニ而、芝居小屋内外騒敷候故、芝居ゟ出見受候処、大杉谷之様子取沙汰致候、空以之外赤ク相見申候、夫ゟ帰ルさニ見候処、また薄赤ク相見候、又者山火事之様子ニも申候、いまた其実不相知（行カ）レ不申候、

二日

一、昼夜共ニ相替義者、差而無御座候、唯雨はしめ〳〵と打降、左なから梅天之内之様子ニ相見候、

三日

一、鵜飼妙院（妙峰寺）殿婚姻有之候ニ付、今朝知照を祝義ニ遣申候、いまた雨は昨日之儘ニ降候、

一、一昨夜火事者、九（九）山成様子、又余程焼失致候旨承候与、安藤喜槃咄申候、

一、今浜光西寺殿ゟ書面相届候処、其内ニ加北郡谷内村（河）永楽（長）寺之新発意と者、去去年已来出入御座候而、新発意方へ者、組合旦那附居候得とも、甚悪布事御座候而、去年四月牢者（牢）致シ候、就夫組之内御門村光照（正勝）寺与申者、当十五日公事場ニ而御詮義之筋有之、不埒成事共申候由ニ而、加北郡三組之寺庵へ御預りニ相成、押水廿七ケ寺へ右加番被申付、無理ニ御受申、無是非相勤候よし申来候、扨々迷惑之事共ニ而候、

一、彼地以之外困窮故、近頃者盗賊徘徊夥布事ニ而候旨、則彼方ゟ申来候、

一、福井殿（松平重富）先例有之ニ付浦廻被致、先々月廿八日ニ三国江被出候、然所ニ前々者、揚屋之女郎・傾城之類壱人も出シ不申候処ニ、此度者不苦趣ニ而、揚屋之格子抔をはつし、家内を寄麗ニ致シ、傾国之類を大体当分ニ配り合セ、前之方ニ者禿抔、後ニ者傾城共居幷罷在候而、殿拝ミ申由、且又先月四日・六日両日者広敷浜廻、是も同様ニ被申渡、傾国共色々之稽抔（芸稽カ）致シ罷在候旨、前代未聞之賑シサニ而候旨、吉竹屋九兵衛咄ニ承候、併越前者以之外困窮故、芝居抔者一向ニ無之候、

四日

一、於隣院殿ニ而承候得者、一昨日越中高岡何町ニ而候哉、出火致シ、家数六百軒焼失致候由、蛭川や八右衛門咄申候、且又朔日之夜之火事者丸山ニ而、是者家数弐拾五軒焼失致候与同人咄ニ承申候、

一、先頃往還手取川水出留り候故、湊浦之渡シへ宮方之柄封之者差掛り候処、似寄者与合点致候故歟、酒代をネタリ候而、渡守共者危キ命を免レ漸々ニ侘致シ、以之外騒敷事(初)ニ共ニ而候旨、隣院殿御咄ニ承候、

五日

一、定日月並之講日ニ而候処、四前頃御書法談半ハ、以之外之大風ニ而、御堂とひら三尺ニ六七尺斗暫時吹まくり候、且大雨しきりニ候得共、八ツ半頃ゟ者晴候而、静ニ相成申候、

六日

一、昼夜共ニ差而相替事者無之候、気色者大体ニ而御座候、

七日

一、今朝承候得者、於宮腰浦一昨日之大風ニ三人乗猟船四拾三艘吹落され候処、三艘者本吉浦へ吹寄、残り四拾艘者行衛無之候由、妙永寺咄申候、扨々哀成事ニ候、

八日

一、隣院殿ゟ人を以来り候者、称名寺殿御出ニ付、及示談度与之事ニ候、相答候者、此頃少々痛処有之候故、難出旨申遣候、漸有テ使僧妙永寺を以御用之趣如何与相尋候処、非余義、少々御本山上納物も有之候間、次手ニ御使僧催促之書面相登セ度与之事ニ而候よし、即返答有之候、因ニ越前西光寺御入来之義御申越ニ而御座候、扨々今朝ゟ之降雨欝々与したる気色、尓今晴不申、以之外淋敷キ事共ニ而御座候、

一、高岡火事之様子、評判区々ニ而、未慥成様子相知不申候、此頃金府ゟ罷帰り候者、一向ニ承不申由、能美屋又助咄申候、

一、今暮合、本覚寺殿庭成井戸へ、十一二斗成女子落入、され共蓋共ニ落候故、過チ者無之候、其落候砌者階子等も持騒キ候故、火事やらん与人々以之外騒キ申候、

一、先頃五日之大風雨之砌、小松材木細工町村井屋小兵衛蔵之旁成水道ゟ辰上り候由、中村屋五郎兵衛咄申候、扨々怪敷事ニ而候、

九日

一、於隣院殿、初而越前西光寺殿ニ得貴意候、酒興相重り種々賦詩・発句シ、咄之次手ニ、如松江鱸と有之候、松之一字唐音ニ而読候事相尋候得者、是者先年公方之儒者林大学(羅山)督之了簡を以、如此唐音ニ読セ候、其謂レ者公方之御院号ニ松之字有之候故、諱而スント為読候由咄被申候、色々申候内、正説之様ニ相聞申候、

一、気色者昼夜共ニ、左而已宜からぬ気色ニ而候、

十日

一、七頃ゟ隣院殿へ参シ、御本山上納銀・書面等相調候ニ付、称名寺殿も御入来ニ而御座候、

一、時次郎殿一代浄土真宗、并嫡子義同宗旨ニ可被為成旨、且当八月頃者小松へ時次郎殿御出、則寺庵之御宿ニ而も候哉之趣、風聞致候、御廻之事者当所ニも不限、三ケ国一統ニ御巡廻之様子ニ取沙汰致候、且又嫡子浄土真宗之思召者、若々嫡男御出生ニ候ハヽ、古国府江可被進思召ニ而も候哉之趣共取沙汰、唯今勝興寺へ者、時次郎殿御配地之内千石、永代寺領ニ被為付置候等之趣共、赤井殿御咄ニ而御座候、

十一日

一、今日者以之外之快晴、来生寺串芝居を心懸ケ、今江へ迄九過頃ゟ出懸承候処、金城主天徳院殿(前田利常室、珠)御法事、今明日御執行ニ付、芝居者両日之間差止候旨ニ而、七過ニ今江ゟ罷帰り申候、寺庵者いまた触者到来不致候、

一、先比調合丸シ置候金勝丸干あかり、都合五百四拾七程有之候内、

四拾弐程は包ミ、薬箱へ入置候、残而五百五程者袋へ入、部屋之折釘ニ懸置候、

十二日

一、三ツ屋村宝海寺新発意、去秋寺社奉行所へ、新発意霊授宝海寺後住之義ニ付追訴致候故、度々於本蓮寺殿僉儀有之候砌者、寺社奉行月番ゟ書立を以及僉儀候、其書立両通、則寺社月番永原求馬(承鬼)殿ゟ差紙面、又者書立等ニも、月番之印有之候、拙両通之分見受申候、然所当春以来之義ニ候哉、又寺社所ゟ書立与号シ、立紙ニ書記申壱通を扣置、右書立之趣者、先達而申入候其方宝海寺後住成之義ニ付、弥親宝海寺之相勧候不正義相伝へ間敷与之趣、壱紙を調可申与之趣、若〳〵相調不申候ハヽ、直ニ公事場江可相渡与之事ニ候間、右之書付相調候得者可然、万一不調ニおゐてハ、右寺社所ゟ之書立読聞セ、直公事場へ可相渡候間、左様ニ相心得不正義不相続趣、壱紙相調へ可然、其方慇ミ候故申入候与、本蓮寺殿被申聞候得共、一向ニ承知不致候、無本意其座者立退キぬる、然ニ先頃角院殿へ出入之六兵衛与者、隣院殿へ参咄候者、先頃寺社奉行所より、霊授御僉儀之趣御書立参候故、角院殿相読聞被成候処、寺社奉行月番之印無之候間、一向ニ霊授承知之様子無之候、奉行印無之事者殊重キ故、月番奉行之印無之候抔咄申候、就夫頃日角院殿寺社所ゟ出府可有之与之書面参候得共、病気御断、出府無之候風聞承候処、其無印之書立与云者、謀書之様子取沙汰致候、彼是考合候得者謀書之事実正ニ而、若々寺社所江霊授ゟ手廻致し、依之出府之差紙面参候故、病気断ニ而出府無之候哉、様子無心元存候、尚又此事実決ニ而於有之者、大騒動之事故、気之毒成風聞存し、隣院殿御舎弟刑部卿殿御咄ニ承之、驚入申、御互ニ気之毒之様子語合申候、

十三日

一、先達而書記致置候、於能州澍法庵法義混難被致候ニ付、其砌も格別ニ御書・御使僧と奉願、御下知を蒙度与之義ニ、途中迄、珠洲郡善慶寺羽喰郡本念寺殿まて参候処、又追飛脚を以、先今度差留へき与之事ニ而、羽喰郡ゟ帰寺致候様ニ承罷在候処、昨日承候得者、其義ニ付、鳳至郡ゟ正願寺与申寺庵京都へ登申候様子、隣院殿御咄ニ而承之申候、何願之義ニ候哉、委曲者いまた相知レ不申候、扨々澍法庵与申者者、云ひろけ候事者存居候得共、所々之変口、差而治ル事と存居不申、気之毒成人付ニ而御座候、此様子ニ而者、当所両寺遠慮之取斗之事も無心元、必竟御本山之御難題ニ不成様ニ与存斗ニ而候、

十四日

一、於隣院殿花之会有之、六七瓶程も出来致、扨々面白キ事ニ而御座候、雨も強ク降候得共、見物も余程相見へ申候、

一、澍法庵今日今江村泊りニ而候旨、慥ニ承申候、角院殿本吉へ宝物弘通ニ参被居候得共、夜前夜通シ候、帰寺被致候、実正成旨隣院殿御咄ニ承之申候、且金平屋清右衛門・筒金屋久兵衛・朝倉屋伝七抔、右之様子咄申候、尚又昨夕方今江村へ、本蓮寺殿ゟ之飛脚急成様子ニ而、以之外走り参候者ニ、北野屋伊兵衛逢候様子咄申候、定而右之為知ニ而も候哉与被察候、御本山之御用人ニも不似合、宿を差置不非宿ニも在ニ被宿候事、大体ならぬ我儘ニ而候様ニ被考候、小松を差除、今江之泊り者臆病之様ニも被存、兎角〳〵難心得存斗ニ候、我儘ニ在寺ニ被宿候事者、何事歟仕組事之示談ニ而も被致候様子ニ相聞へ申候、定而能美郡格別之御使僧願之義、邪魔可被入申、巧ニ而も候哉与被存候、一笑々々、

一、昼八頃四手駕籠ニ而、澍法庵打乗り寺町通り参候を、慥ニ見受申候旨、埴田屋長兵衛咄申候、扨々臆病之第一人也、

十五日

一、寺社奉行所ゟ遠慮・閉門・流刑等之者、組支配之内ニ有之哉之趣御尋之触、四月之月附ニ而出候所、角院殿ゟ之添紙面ニ者二月十五日与有之、筆頭本覚寺殿ゟ隣院殿へ相廻り候処、拙御示談、就夫御

咄先ツ本覚寺殿へ触相返シ、一往可相尋哉否之義、及示談被成候故、可然御尤ニ存候与申候得者、則御使僧知雲へ御口上之趣者、寺社所之御触被遣、慥ニ受取致披見候処、寺社所之御触ニ者四月与是有、本蓮寺殿之添状ニ者二月十五日与有之候、月之間違甚之事ニ候故、如何之趣ニ候哉、寺社所之御触之義ニ候間、一往御尋申上候与之事、申被遣候得者、本覚寺殿ゟ之返答ニ者、御尋御尤ニ候、角院殿へ相尋、自之御答可申上与之口上、暫ク相見合被成候処、則本覚寺殿ゟ使僧参候、其口上之趣者、角院殿へ相尋候処、是者御尤委曲者執筆之不調法与申事ニ而、則前之二之字を書直シ、四之字ニ致候而相渡申候与、使僧申候ニ付、又々隣院殿被仰候者、然者執筆之不調法与申事添状ニ而も被致申候哉、又者角院殿へ御尋之上、貴院ニ御直シ候哉之事、又候御尋可被成哉之趣、御示談拙へ有之候ニ付、先々夫ニ而事相知レ候上者、強而御尋も、如何御座候哉与申候得者、先夫ニ而止候得共、明朝ニ灯明寺を御召被仰候而、可然与申候得者、尚夫ニ而止ミ申候、扨々麁抹成御触之執筆、御用を浮〻御仲間を盲者ニ被致候為体、言語道断之事ニ而候、

十六日

一、早朝ニ超覚坊為御使僧本覚寺殿へ被遣、夜前御申残之御口上ニ而被遣候処、又々被仰候通り御尤成義ニ候、最初於爰元其所気付ス印形致候得者、強而左様成事も難申候得共、弥執筆不調法成趣、慥ニ承届置候得者、先此度者此儘ニ而御廻シ被下与之趣、及返答候与而、則御使僧超覚坊直ニ拙方へ又々御示談ニ被遣候ニ付、御答申候者、然ル上ハ先此度者其直シ候儘ニ而御廻可然与申候得者、其分ニ相成申候哉、其後者御使も相見へ不申候、扨々角院殿之不調法、寺町院殿（本覚寺）之残念、気之毒成事共ニ而御座候、

一、一昨晩澍法庵今江村願勝寺ニ被泊候而、角院殿抔示談之趣者、残り御仲間頓而遠慮被仰付へく様ニ与之示談有之候与之様子、一決有之候与、隣院殿御舎弟刑部卿殿御咄ニ承之候、澍法庵与申坊主も行先不知大たワけ、加党徒之とらくら者共、足かふらりしやらり与不成様ニ、身用心か第一之事ニ而御座候、打手大笑々々、

一、寺社奉行所ゟ之御触如左、

一、閉門

一、逼塞蟄居之者

一、遠慮幷自分ニ指扣罷在候者

一、流刑幷在郷へ被遣置候者

一、追込置候者幷乱心之者之外、一門江御預之者

一、陪臣ニ而も上江掛り候義ニ付、遠慮等申付置候者

右之通被仰付置候者、組支配之内有之候ハヽ、如何之子細ニ而、何年何月ゟ如此与、其罪之様子委細ニ相調へ、当月廿九日迄之内、有無之儀紙面可被指出候、且又組等之内才許有之面々へも被申渡、是又有無之儀、右日限ニ夫々紙面直ニ指出候様ニ被申聞、尤同役中可有伝達候事、

四月

別紙之趣可被得其意候、以上、

四月九日　　前田駿河守（孝昌）

篠原弥助（保之）殿

別紙両通之趣被得其意、夫々可被申渡候、尤門前之輩江も不相洩様ニ是又被申渡、右有無之儀、当月廿五日迄ニ永原求馬宅江可被書出候、先々早速被相廻、落着ゟ可被相返候、以上、

四月十四日　　篠原弥助

小松

本蓮寺

別紙三通之趣被得其意、組合之寺庵等へも夫々可有伝達候、以上、

四月十五日　　本蓮寺　印

（但シ、此四之字者二之字之直シニ而御座候、此義ニ付先ニ書置候趣、

本覚寺
勧帰寺
本光寺
勝光寺
松岡寺
称仏寺
静照寺
願勝寺

追而有無之儀、当月廿日迄ニ可被書出候、尚落着ゟ可被相返候、
以上、

右之御触、朝五半頃本光寺ゟ到来、見刻本蓮寺へ相返シ申候、

一、於金沢彦三町弐番町菊池十兵衛宅喧嘩有之、相手者御小請(ママ)ニ而、菊池氏首尾能生害為遂候後、切腹仕損シ候由、埴田屋長兵衛咄申候、且茶屋九兵衛先頃観音之御能之節、出府致帰宅□

(欠損)

□相尋候得者、則本龍寺申候者、別而相替ル事も無之、覚書ニ致シ、一遠慮能美郡小松何町何寺与肩ニ何年何月何日ニ本山ゟ被仰付置候与書、奥ニ者右之外拙僧組合門前之輩迄遠慮・閉門等無之候与御書候而、可然候与申候ニ付、又申入候者御触ニ遠慮・閉門等者、何ニよつて何年何月ゟ被申付置候哉、罪之様子委細ニ書出へき与之趣有之候間、何ニよつて与申事も書出不申候而者難成存候、且拙僧共者浄誓寺遠慮之砌も、寺社へ御請差上置候間、罪之様子も書記可致候与申候得者、其義者重而御尋有之候節之事、先此度者右通りの御答迄ニ而可然与申聞候ニ付、難心得候故、又押返、金沢等之様子被聞候哉与申入候得者、相答候者、則金府御坊・瑞泉寺殿抔之趣、如斯与相答候迄ニ而、慥成義も無之候故、隣院殿へも右之様子相咄申候得者、一笑之後、一向ニ本龍寺之申分不呑込之様子ニ相聞へ申候間、又是ゟ尋ニ可遣与之事ニ而、則超覚坊参シ帰候処、相替ル義一向ニ無之候故、又一笑之後、申究候趣者、組合ゟ閉門・遠慮・蟄塞等、門前之者迄も有無之義、組頭迄取納、角院殿へハ組頭一判ニ而相済シ候而も、可然と隣院殿御申ニ付、其通りニ相決シ、則案文共調、夫々江遣申候、先浄誓寺へ遣申候案文如左、

今般従公儀御触御尋之趣、奉得其意候、拙僧義、何年何月何日本山ゟ書立を以、遠慮被仰渡罷在候、拙僧外門前之輩遠慮・閉門等無之候、仍而御断申上候、以上、

能美郡小松八日市町

(欠損)

□門・遠慮等無御座候、御尋□　□上候、以上、

能美郡小松東町

年号月日　勝光寺両判

本蓮寺

上来書置候通ニ調へ遣可申旨申合究候、右御尋御触之取計、右之通ニ而可然被存候、

一、毎年宗門帳調指出可申文書如左、

能美郡小松何町何寺

一、去年宗門御改以後、召置候家来男女共ニ壱人も無御座候、

一、能美郡小松何町何寺

一、文言右同断

能美郡小松勧帰寺家来

一、浄土真宗　何郡何寺旦那下人　去年九月ゟ召抱候　下男名

一、宗名　――下女　下女名

右拙僧幷組合之寺庵門前之輩、明和四年宗門相改帳面指上申候以後、召置候家来幷借家人等宗門相改、人々寺証文指上、父夫同宗同寺之妻子除之、帳面記上之申候、比外自宅・借家ニ入置候懸人・屋守等之者無御座候、勿論宗門御改洩申者抱置不申候、以上、

能美郡小松東町

明和五年四月　勧帰寺

本蓮寺

右者隣院殿ゟ恩借致シ写置候者也、只今遠慮之寺庵ゟ寺請状取申案文之通り如左相調へ、本蓮寺殿へ指出可申候、

拙僧組合之内、能美郡小松八日市町勝円寺、去年宗門御改以後召置候家来、男女壱人も無御座候趣、相断申候ニ付、如斯ニ候、以上、

年号月日　勧帰寺

本蓮寺

右も隣院殿ゟ恩借致写置申候、此壱通者別ニ致シ、惣帳面之外ニ指出可申候旨、則隣院殿御咄ニ而候、其通可然相心得取計可申候、且召置候男女家来、其時有無可相考候、

一、夜八ツ頃ゟ以之外之風雨、音しけ〳〵候得共、明方ニ晴申候、

十九日

一、気色者大概、昼夜共ニ差而替義者無之候、且御堂やら以之外中ノ間天井張申ニ付、大工善太郎今朝迄ニ組物等之図引仕廻、今日より又木引、向ひノ九右衛門参り木引致申候、中壱間百六拾目作料渡シニ致候、大工者一昨日ゟ入申候、

二十日

一、能州妙厳寺殿婚礼有之候ニ付、知照遣申候処、今七過帰寺致候、澍法庵為御本山御使僧巡廻之様子、咄承咄之申候、妙院殿へ澍法庵止宿之一宿前ニも候哉、鵜飼不正義七八人之者共ゟ澍法庵へ取組、口称ニ奉頼事を悪敷申成シ、則其時之賄路金子弐両遣申候処、受納致候事、余人不相知故、妙厳寺殿止宿之節、出迎ひ之僧俗夥布事共ニ而候処、善知識之御使僧ニ而候得者、兼而申合候法義之正不如何与左右旁を張罷在候処、不正義之者共ゟ書付指出申候、其文言如左、

口上

一、今般上様為御用、当郡御巡廻被為遊候由ニ付、幸之儀与奉存、同行中申合、上様為御冥加金弐百疋・鳥目五百銅指上申候、於御用先々者御難題ニ奉存候得共、御持参被為成上納奉頼上候、

一、乍恐御窺申上候、当流御安心之趣、此辺御僧方江相尋御聴聞仕候所、如来之御誓ハ口称之本願なれは、諸之雑行・雑修・自力の心を捨て、我身は悪き徒者と思ひて、御影前へ向ひ言葉を并へ、私今度の一大事の後生御助候得と一声申上ルを、他力之信心と被教候ニ付、其通ニ奉頼候得とも、又疑おこり候を如何可仕与相尋候得者、疑起り候ハヽ、又頼直セと被教候故、前々のことく幾度も〳〵御影前ニ出奉頼候得とも、埒明不申、其上仮名御聖教御言葉の端を御聴聞仕候得者、何とやら御僧方の勧方相違の様ニ奉存、明暮歎居申候処、明和弐年酉三月、幸上様為御用御代僧様（其トキハ福口寺）御巡廻被為成候ニ付、私共口上書を以御聴聞奉願候得者、則私共被召出、御聴聞被仰候者、全御影前江出、口上ニ而申上ル事ニ而者無之趣等、正意之御勧化細ニ御聴聞仕疑晴、難有仕合ニ奉存候、然所御門徒中ゟ御使僧様江出候儀を曲事と申立、両度の御講会合ニもはふき被申、其上私共を被難候者、其方共者口称を嫌ひ頼ぬ法義なり、又者自然法なりと被申候而、猶更口上頼を本と被勧候故、私共家内妻子親類等心惑ひ、いつれを御正意共難弁、歎暮居申候間、乍恐御聴聞被仰聞被為下候ハヽ、難有忝奉存候、為其雑言の一紙上之申候、御高覧奉頼上候、以上、

明和六年二月廿七日

珠州郡鵜飼妙厳寺門徒

重兵衛
松田玄硯
八郎右衛門
吉右衛門
彦左衛門
作左衛門
市蔵

善知識様之
御代僧様

右之口上、澍法庵へ指出候得者、一覧致候故隙取、二月廿七日忌之御通夜も以之外遅ク相成、暮合ニ相成通夜初り、澍法庵之法談何れも念称之実不(否)、今哉与耳を傾ケ聴聞致候所、怪敷も申出タリ、此辺ノ僧中法談勧化之砌者、勧者仏前ニ奉向、頼むを以宗之本意と勧メ、三業一致を以、他力之信心決定の相と勧事難其意得、三業一致を他力之信心決定之相と申事、当流之御勧化ニ其証文なし、且又如来之本願者口称を以其体とするとあれハとて、口上を以頼まね者ならぬと云者、不仏法の邪道と云者也抔と申、且又百年斗以前輪嶋之信教院と申者、如来を奉頼を以、宗之本意与被勧候、其頃於越後新潟不退院円筬与申悪僧、其意専一ニして此辺を徘徊シ、当流之御本意ニも不有事を申談シ、聞ク人を迷惑さするを不知、加党徒之致候事、不仏法之大外道也、今以其旧執難捨、かかる不正義を勧申事言語道断之至抔法談々致候処、不正者喜ひ、正者恚り、翌日廿八日之晨朝ニ者参詣抔も少々ならて者無之、勿論翌日出立之節も、僧俗之見送一人も無之、漸不正義之者共之内ゟ、一両人出候ゟ外者無之候、加様成偏屈申候故、御台所御難渋之義ニ付、懇志可励之御用趣与申候得共、一向ニ僧俗共ニ承知不致、彼澍法庵之馬鹿坊主、金沢ニ而遊女狂ひの積り候故、借金之重り故ニ虚言を構へ、自身之受納ニ可致ため抔とて、一向ニ承引致不申候旨、知照咄ニ承候、扨々此辺へ去々年巡廻之砌、法義売て口をこすり、度(渡)世活命之為抔とて、任誓法義禁ノ候事も、皆虚と成り、我身捨、度(渡)世活命之為ニ、国を替へ境を越て、仏法を売り、賄賂を取、善知識の教へを我意に任セ、御本山を軽しめ候、冥罰現ニ白状之為■体、歎も愚カ他宗へ之面目、一宗ノ恥辱言語ニ難述、破家坊主難筆紙尽、記之も恥敷口惜斗ニ筆ヲ止申候、

二十一日

一、越中魚津照善寺舎弟少将、学解心得違ひ之義ニ付、御本山江被召御僉議決定シ、左右方対命(命)殊終り、弥少将称名願体与申教候事、誤ニ決シ候節、如何可申付与家老中ゟ御窺申上候処、被仰出候者、惑要文、学解之誤なれハ、我壱人者無是非も、他之人を教へ候者誤なれ共、脱衣シ追放致候事をも不便与被思召、入置候処を寺内ニ可致旨被仰出候故、太鼓之番屋之下ニ揚屋之様成処をしつらひ、入置候処、其後楽邦院様ゟ御家司中何時成共相揃可罷出旨被仰出候ニ付、或時打揃六人共ニ東殿へ上り候処、被仰出者承候得者、魚津少将義此度誤りニ決候故、獄屋へ被入置候旨承候、築地之旁ニ獄屋を作候事如何相心得候而、獄屋ヲ為作候、本願寺之老分なら者其心得も可有筈ニ候を、如何相心得候而、獄屋を為作候、返答承度与被仰候処、家司中是非之不及返答ニも、唯御門主ゟ被仰出候故、御意もたしかたく候故、獄屋と申義ニ而も無之、唯揚屋ケ間敷事を取置シ、入置候与家司中被申上候処、又楽邦院様ゟ被仰候者、元来本願寺之可為家司者者、其心得も可有筈也、忝も当家之御影堂は宣如上人御再建之砌、今帝之紫宸殿之円(内カ)を頂戴被成、其通りニ草創被成、殊ニ築地等も禁裏之通ニ構へ、且北之隅ニ忌門を切候事、当流ニ者雑修与嫌可申を禁裏の写故忌門ヲ切り、且又伏見・亀山両帝之勅願所として、則方八丁を伏見院殿ゟ敷地与定メ寄附有之候、築地之旁ニ獄屋を作り、身ニ誤り有之候者を入置候事、内裏今帝へ之憚有、家之家司たる者其心得なき事、不届之至与、大キニ御呵りを蒙り、自夫獄屋をこほち、少将を御寺内町家預ケニ被仰出候事、是等絶言語候御取計ニ而候旨、其砌□　□有之候よし、今江円月□
□築地北之隅之□　□評判有之候
(欠損)
(二十三日ヵ)
□且隣院殿七頃□　□暮六頃ゟ俄ニ思立、串へ芝居ニ参申候、

二十四日

一、日之内、差而〳〵相替り申義者、一向ニ無之候、

二十五日

一、先日於小松鷹匠町七ニ成候男子、狐狸天狗之仕業ニ候哉、夜ニ入候迄相見へ不申候故、其名を呼尋候処、夜四頃城中御花畠ゟ出候よし、薗原左京（薗村来生寺）咄申候、怪布事ニ而候、

一、当所八日市町久津屋次郎三郎類家、松任ゟ勝手女中為馳走、今江柳屋ニ而遊興有之、久津屋次太夫杯も参合候ニ、夜ニ入女中者串ノ芝居へ参候ハん与、皆船ニ乗り出候処、其船頭子共はつれへ棹さゝせ参候処ニ、常ニ猟船も参候はん潟之主居申候与申方へ参候哉、船ニ棹さし行掛り候処、前後左右へ一向ニ船動す、兎角致候得共、詮なく船頭者勿論、船中之女中殊之外之迷惑、彼是貪着致候得共、次太夫者酒酔前後茫隔、兎角之計ひも居申候内、真向ゟ壱艘之遊山船ゟ呼掛、何と其船者猟船ニ而候哉と声を掛候処、是幸と我等を助よと又声掛候処ニ、左右漕寄、誰ニ而哉相尋候得者、我等者久津屋次郎三郎類家之女中、松任ゟ来り候者与相答申候、貴船者誰人そ与又尋候得者、我等者諏訪之神主遊山セり与相答へ候程ニ、夫ゟ彼是其様子を語り候を、夫者与驚キ、兎角計申内、久津屋次太夫妻船底を見候得者、火珠弐ツ有之、ふと見候得共、申出も不致、暫時之内水底ゟ右之火珠弐なから飛出、行衛も不知、失意致候、夫ゟ船動候故、芝居へ者参申候、是実ニ今江潟之主ニ而候哉、寄怪之事ニ而候旨、承之申候、是者廿一日之晩之事ニ而候、

一、廿三日之晩、隣院殿奥方拙方へ遊ひニ御出、帰り之節、知照御見送り申さんと門口へ出候処、東之方ゟ西之方を指て火珠壱飛行候を、慥ニ見候旨茂承候得共、是等者只今頃気色之替り、早降之模様ニ依テ飛行之事者、度々弊も見届申候、左而已替りたる事ニ而者無之候、唯前段之一品怪敷被存候、可相考候、

二十六日

一、今四頃於下里長野田村、安兵衛与やら申者壱軒焼失致、則火事吊仁助遣申候、

二十七日

一、先頃金沢紙屋宗意上京ニ付、当所京町万屋八兵衛方ニ泊り申候、其伴ひ申候者ニ対刀（帯）之者壱人有之候、八兵衛其宗意へ挨拶ニ出相尋候者、何故之上京ニ而候哉之趣申候処、宗意相答候者、何与申候而一方へ寄たる事ニ而も無之、色々御坊之御用ニ付、此度上京致候よし相答、又八兵衛江宗意ゟ相尋候者、当郡ニ者此春ゟ任誓御講相初り槃（盤）昌之様子有之候与承候、様子者如何与相尋候処、八兵衛相答候者、一向左様之義承不申、去暮ゟ御真影御肝煎講中も、先年ゟ者むゑ、近年中絶之処、再ヒ御槃（盤）栄ニ被為有候故、御本山上納も度々之事与申候得者、宗意又申候者、其上納者何程宛上納致候哉与相尋候処、八兵衛申候者、何程ニ而候哉、下拙ゟ度々京三度ニ渡候得共、金子故高相知レ不申候与相答申候、然所傍之対刀（帯）之人申候者、其御真影与者何事ソ与相尋候処、八兵衛相答候者、是者祖師之御真影ニ而、先年時之御上人思召を以、当郡へ被下置候故、古来ゟ是迄其御真影を御坊同事ニ相心得、尊敬仕来候与相答候処、其傍之人初而聞候様子ニ而、唯是は〳〵と申候斗ニ而、八兵衛も勝手へ入り、跡者其儘ニ止ミ申由、京町伊勢屋弥兵衛ゟ御聞之様子ニ而、赤井殿御咄ニ而承之申候、則同席ニ而隣院殿も御聞被成候、

一、角院殿是迄者公辺之取次役ニ而候を、此度澍法庵与取組、寺国法之触頭ニ成度旨ニ而、澍法庵被頼候処、此坊慥ニ其事を受合、夫ゟ金沢御坊之御肝煎講中弐拾人衆申有、此方へ澍法庵より取持之義被頼、尚又角院殿を寺国法之触頭ニ致シ、能美郡を御坊付キニ致度候間、各々も右之一件可被取持旨被致示談候処、欲ニ耽りシ宗意ことき之族者実とも受合候哉、多分者受合不申候、其内ニも分別候者有テ申候者、元来小松者微妙院様（前田利常）弐拾年之御在所なれハ、御坊へ取

附候ハんと計、此取持候共、残り五ケ寺之内ニ何成寺跡何成御墨付ニ而も有之候而、思様にも成不申時者、還而御坊之恥辱与相成可申候間、我等其義ニ付御取持之義難成与申候者者、多分ニ御座候、然所を澍法庵申候者、然者除角院殿外五ケ寺之仕損を見出シ、弐三年之内ニ遠慮為致、於其内ニ寺跡書物等をさかし致シ、三日成共、遠慮之間ニ取計可申旨、又々及示談候様子者、角院殿を慥ニ触頭ニ可致与澍法庵受合候様子ニ相聞へ候旨、則弐拾人衆之内ゟ御聞被成候旨、赤井殿御咄ニ而承申候、此砌も則隣院殿御同席ニ而御座候、然者先達而思召を以功徳聚院(永順寺真如)様被仰出候御書立を、本覚寺殿ゟ角院殿へ渡間布と被申候事尤ニ被存候、人者面ニも不似合もの、心底者難知、毒蛇悪龍之御教誡、非虚説、可愧可畏者唯此一なり、能々思量をめくらすへし、

一、金城主来月二日御帰城之様子、慥成事ニ而候よし、赤井殿御咄ニ而承之申候、

二十八日

一、越中超願(高徳)寺願事、首尾克蒙御許与、今七過拙庵迄罷帰申候、且其少シ前方、能州妙厳寺殿ゟ多賀丸出生幷婚礼音物相兼、為祝義弥八被遣、同時着致候、

一、澍法庵当十九日京着致候由、超願寺咄申候、且澍法庵着即刻下役人へ相廻り申候、承候処、役人之分者不残手廻シ致置候よし、承之申候、

一、三ツ屋宝海寺新発意霊授義、弥明日公事場へ渡り可申由、妙永寺・知照両人ゟ申聞セ候、扨々角院殿如何与被案候、

一、上田織部(正久)義者、楠正重之(遠)け(系)図ニ而候処、下間之蓮位房之(遠)け(系)図ニ書替へ、兼而御門主へ入御内覧候故、御家老ニ被仰付候後、桔梗之紋拝領致候、桔梗之紋者蓮位之定紋ニ而候、上田氏之其意趣を探尋ニ下間之家相続致、坊官望之様子ニ相聞申候、且又長浜横超院殿之御新発意を貰申候由、彼是望之様子相聞申候、且又横超院殿之御所存如何思召候哉難心得候、相承ハ御家来、此方ハ御身柄、様子唯々不審ニ被存候、

二十九日

(欠損)

□七日談シ候□　□曹洞五大寺之和尚達□　□□已キ口を閉、徴胸堪肝、何れも黙然与して居たりけるニ観候、現ニ得勝利、石州之和尚法印者脱衣之追放、或者後口手ニ掛縄引候事同前之為体、不便成事共也、観候者、東御門主ゟ慈悲を以帰国致候者、挟恚恨へきを尊察し給ひ、一生御養御扶持を頂戴シ、天晴之手柄、前代未聞之事承之候、

一、三ツ屋宝海寺新発意霊授、公事場へ弥渡り候ニ付、角院殿幷役僧両人出府致被居候処、何歟口問共有之候処、兎や角ととまつる体、返答も前後致候様子ニ而御さ候事、知照承之咄申候、扨々気之毒千万、若々先達而之霊授へ申渡シ候書立者、寺社所之謀書ニ而者無之候哉、様子無心元評判聞悪敷候、

五月朔日

一、宝海寺霊授義、公事場へ渡り候事、いまた実不(否)難決候、其故者霊授ハ寺社所ニおゐて御吟味有之、弥不正義受続間布之趣口上書致候得者、親智浄(他)へ対シ不孝ニ相成候故難成条、不相違哉之趣、一往御尋有之、左様之通り前々ゟ申上候通相違無之趣、慥ニ相答候得者、其儘ニ相返シ、又々角院殿へ御預ケニ相成居申候由、安藤喜槃(筆)咄承之申候、

一、於小松名有ル若者共、五人船ニ取乗候而、安藤喜槃(筆)・上官寺之薮成笋を盗ミ、又角院殿之薮成笋をも悉ク日昼ニ賊候故、角院殿ゟ承来、追掛僉儀を致、其上町奉行江相断候哉、以之外重ク相成可申与取沙汰致申候、盗候者先月廿八日之事ニ而候、笋之数者百六拾本ニ而候様子、若々重ク取計之事ニ候得者、扨々不似合取計共ニ而御座候、且角院殿も此頃者寺井村ニ而霊宝弘通有之、昨日帰寺之様子、

且帰寺後僉儀可有之筈風聞承申候、如何相成候哉、取計之様子共無心元候、

二日

一、角院殿出府致シ居られ候様子、弥八慥ニ見受申候、先達而記置候様子之一巻も、則宿ニ評判有之候旨、弥八咄申候よし、知照咄ニ承候、

一、笋盗之者共侘致シ、今日相済申候様子、承申候、

三日

一、舎弟他寺江遣シ入院之砌、組合へ遣可申送状之文言如左、

拙僧舎弟何、今年何十何歳ニ罷成申候処、何国何処何寺所縁も御座候ニ付、後住ニ仕度旨、則何寺一門中幷惣旦那中納得之上を以申越候ニ付、指遣申度御座候、尤誰其地へ罷越候而も、出入等仕候ハヽ組合中へ掛御苦労不申、拙僧罷出埒明可申候、依之誰判形相添へ奉願候、以上、

何国何郡何宗

明和六年何月何日　何寺印判

誰印

何寺

御組合中

右者、舎弟大弐高岡超願寺江妙院殿ゟ被遣候ニ付送状、金沢御坊宗敬寺ゟ草案出候を見候故、写置申候、

一、此頃角院殿へ越前テンレイ（ママ）参候而、勧化致罷在候故、則来生寺へも右之様子頼ニ参候由、来生寺直ニ咄承之申候、一笑々々、

四日

一、妙院殿家来弥八、爰元二日ニ出立致シ、金沢泊リニ参候処、超願寺家来金沢之宿中屋豊右衛門方ニ而相尋候処、いまた参不申由、相答候与咄申候ニ付、様子無心元候故、今日湊・水嶋迄知照を遣為相尋候、

一、此間三ツ屋村宝海寺新発意霊授公事場へ渡り候ニ付、寺社所ゟ角院殿被召候得とも、在遠方寺役故、いまた帰寺無之候与而、相返候由承之申候、

一、角院殿笋盗候ニ付、則門徒赤瀬屋□

（欠損）

□□□故今日出立、快晴珍重之事ニ候、道中も無恙帰寺あれかし候存候、

五日

一、三王（他）・諏訪之両人氏子、御輿幷神輿舁之者共ねり子之装束等ニ至迄新出来ニ致シ、祭りを仕置申候、先達而御旅之節者、気色不快候得とも、今日者快晴、今日之祭者是迄者無之候得共、先年者有之、中絶之処唯今取立申由承候、

一、前田式部（兼色）舎弟前田兵部（兼色）、米ぬけ荷騒動之義ニ付、賄路取候様子相知候砌御咎候哉、内遠慮致被居候由承之申候、

六日

一、於角院殿、越前テンレイ勧化幷太子伝弘通有之候様子、妙永寺咄承之申候、

一、越中高岡仁兵衛与申者、越前福井殿之供を致シ、江府へ参シ、帰ニ京・大坂へも参候、帰ルさ今朝五半頃立寄申、高岡色々言伝共致シ遣申候、

一、夜前九半頃、矢崎村ニ而火事有之候得共、火者洩不申、壱軒焼失致候様子、能美屋弥右衛門咄申候、

七日

一、明六頃ゟ雨降出シ申候而、尓今〳〵止ミ不申候、併なから当月四日ゟ入梅ニ而候間、雨降可申筈ニ候、

一、澍法庵ゟ能美郡へ之御使僧を差留候様ニ申候者、金沢御坊之後堂ニ而之事ニ候、而モ夫を聞候仲間中之内ゟ直ニ御聞之様子、則隣院殿御咄ニ而承之候、是者先頃金沢御門徒之中ニ死去有之候而、浄誓

寺ニ一宿被成候砌之事ニ候、

八日

一、江州八幡之者共、毎年松前へ売物仕込ニ下り候ニ付、越前吉崎・加賀本吉辺之宣布船持を頼ミ、船を借り、松前へ下り申候、就夫先月五日前ニ右之者共拾三人乗、八百石積ニ一艘塩を積、吉崎を出船致申候処、先月五日之大風ニ於松前沖破損致候、尤仕込ニ下り候者に候得者、金子者弐千両所持致居申候、然ニ屋内船壱艘漸々ニ助り候故、其船ゟ右破損船之様子見分ニ参候処、一向ニ死骸・船板等打上申体見へ不申、且彼是相考候得者、金子所持致居候故、定而打殺シ埋置候哉与被存候、依之右之様子吉崎へ及案内候哉、昨日者於吉崎一時ニ葬式拾三有之候由、能美屋又助咄ニ承之申候、兎角〳〵金か敵之世界ニ而御座候、

一、矢崎村焼失之翌晩、越前ニ而候哉、南之方高山越ニ火事、夥布様子相見申候由、若杉屋半兵衛咄申承之候、

九日

一、昨日者気色も快晴、夜も宣布相見候処、今朝夜明方ゟ俄雨降出申候、併五半頃ニ者晴申候、扨々降候音瀟々与相聞候、

一、今日者三百五拾石当所町家へ出候由ニ而、軽キ者共手々ニ袋俵を携へ、御貸米配分ニ参候様子ニ而、賑布相見申候、

一、郡中御講志銀、御本山上納仕候ニ付、御印御差下シ、家司中添状文言如左、

貴札致拝見候、先以御門跡様御機嫌克被為成御座候、然者其郡御講志銀、別紙帳面之通指上候ニ付、為御差登候て落手候、則右之御印指下シ候間、可被相達候、恐々謹言、

上田織部　正久　印

四月廿七日　石井隼人　政忠　印

加州

小松

勝光寺殿

勧帰寺殿

右之添状、今四過隣院殿ゟ為御見被下写置候、且上包之寺号烈右之通、箱之上書者勧勝与有之候、内外不合如何、可為麁抹条顕然ニ候、

十日

一、浄誓寺旦那鍋屋亦右衛門病死致シ候ニ付及案内、葬式者暮合、則当番へ妙永寺知照(江)申付候、

一、赤瀬屋重兵衛死去ニ付、諷経遣候砌、霊授一件同苗次右衛門ニ相尋候処、申候者、いまた霊授義者公事場江ハ渡り不申、先頃霊授寺社所江被召、先達而再三、親知浄不正義相勧候を受続間布趣、口上書致候様ニ申遣候処、何分ニも難成趣及断候、弥左様成心底ニ落着候事ニ候哉、今一往思案も可有旨、与力共ゟ申入候処、何分不正義受続間布与之口上書者難成与申候故、又重而親知浄幷霊授被召、右之一件被相尋候処、親子共ニ一向不正義抔与申候事者身ニ不覚事ニ候与相答候故、其通り口上書を寺社所江取置候迄ニ而、いまた公事場へ者渡り不申候与、次右衛門咄申候由、知照承之、又々咄承之候、

一、能州妙院殿家来爰元出立之日者、宮長(永)聞成寺方ニ一宿致シ、翌三日四頃中屋豊右衛門方江参候由、則四日出之書状ニ超願寺申越候、

十一日

一、於安宅、金沢五夕・井蛙、越前丸岡之梨一抔打集り、千句興行有之候由、安藤喜槃咄ニ承之申候、其外相替義者無之、唯々雨者晴間もなく折々降敷、実も入梅之様ニ相見申候、

十二日

一、昼夜共ニ差而相替義者、一向無之候、

十三日

一、昼夜共ニ別条無之候、昼之内ハ雨者降不申、曇り気色ニ而ハ有之候得共、入梅之内ニ者先宣布気色ニ而御座候、

十四日

一、昼之内者雨はら〳〵と少々宛、時々希ニ降候得共、続たる事ニてハ無之候、七過ニ少々雷弐三度相聞申候、併其時者雨一滴も降不申候、

一、於金沢芝居弥願事被仰付候由、承之申候、初り候ハヽ無賑敷可有之与遠察致候、

一、手前御堂於北側切戸有之候、其旁ニ年来五拾歳斗と相見し男壱人幷拾弐三歳斗と相見し子壱人忍ひ居候処、誰哉与相咎候処、答候様ハ、初夜有之候様ニ与存候抔申候、初夜者無之候程ニ早々帰候様与申候得ハ、出所を忘レ候体ニ而、釣鐘堂之方ニ行、後居申候様子ニ相見、以之外うろたへ候体ニ相見申候、何謂レニ而候哉、難心得者ニ而御座候、乞食之様子ニも不相見、何事ニ参候哉、所存不審ニ存候由、知照咄申候間、自夫挑灯をたて御堂へ廻候、

十五日

一、今日者以之外之快晴、但シ七過頃ゟ隣院殿へ参候処、教恩寺了明も同席ニ罷在候、於金沢芝居弥願之通り被仰付候由、風聞承候与申候得者、芝居ニ而者無之、角力ニ而候由、則今日五人下り候旨、知雲咄申候、隣院殿幷了明も其通り与申候、

一、於一針村当寺旦那宇兵衛後家、先妻之嫡男壱人有之、且其後家之子男弐人有之候処、其後家村役人へ願申候者、先妻之子を仕出シ、御高幷家財等当分ニ致呉度由、願候処聞届、則先妻之子を仕出シ、則其子も納得ニ而出申候処、いまた家財等も分不申候ニ付、子之方ゟ役人へ届候故、後家を呼寄糺明致候処、荒涼成事共申候故、不得止事、其村之手先若杉村兵助へ断申候処、早速ニ其後家ニ手錠を指、帰シ申候、且又役人共も惣領を仕出申候事を納得致候事、難心得候与大キニ被呵候旨、則今日之事ニ而候よし、妙永寺咄ニ承之申候、

一、九頃於東町之上、馬気を違ひ、馬子を追懸ケ、既噛付んとし候故、以之外騒敷事ニ候、

一、当城主当月十九日慥ニ御着城之様子ニ而御座候旨、金沢能瀬屋半兵衛咄承候、且於金沢角力追付有之候旨取沙汰致シ、且又昨日相撲取五人罷下り候間、何時ゟ初り候哉与相尋候得ハ、一向ニ承不申、其角力取者富山へ行候哉、越中富山ニおゐて、追付角力有之候旨、風聞致候与咄承之申候、金沢ニ而者無之候、

一、越中富山松平出雲守（前田利與）殿、国主並ニ被仰渡、大聖持松平備後守（前田利道）殿者上使御暇ニ而候、何れも公方ゟ之被仰渡ニ而御座候旨、隣院殿御咄ニ承之申候、是迄無之事、何之思召ニ候哉、難心得事共ニ而御座候、

一、御本山御台所入之事、得度御詮儀、御名号・御剃刀・葬式□
□を除キ、毎歳□　□之金子六□□　□之与□

（欠損）

人間社会環境研究　第37号　2019. 3 

# 【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏兎記』（明和六年三月～五月十五日）

人間社会環境研究科　人間社会環境学専攻
小　西　洋　子
石川県金沢城調査研究所　所長
木　越　隆　三
人間社会研究域学校教育系　教授
黒　田　　智
石川県立図書館　加能史料調査委員
室　山　　孝
人間社会環境研究科　人文学専攻
渡　貫　多　聞

# Supplementary Note and Reproduction of Utoki in the Collection of the Shomyoji Temple in Komatsu

KONISHI Yoko
KIGOSHI Ryuzo
KURODA Satoshi
MUROYAMA Takashi
WATANUKI Tamon

**Abstract**

Utoki was a daily journal kept by Shuko, the eleventh chief priest of the Shokoji Temple in Komatsu, during the year 1769. The journal is famous for the historical information it contains on Komatsu-jian-sodo. Utoki not only has important information about the Jodo Shin sect of Buddhism in the Edo period but also various stories that Shuko recorded that should capture the interest of researchers. It is our intention to introduce a reprinting of the entire text in several installments. We hope that researchers will use our reprint to deepen discussion on Komatsu-jian-sodo.

**Keyword**

Komatsu-jian-sodo, Gunchu-goei, Nomi-gun, early modern Jodo Shinshu sect